2024年5月12日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

あなたが居てくれるので

［コリントの信徒への手紙一12章1～11節］

兄弟たち、霊的な賜物については、次のことはぜひ知っておいてほしい。あなたがたがまだ異教徒だったころ、誘われるままに、ものの言えない偶像のもとに連れて行かれたことを覚えているでしょう。ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。ある人には“霊”によって知恵の言葉、ある人には同じ“霊”によって知識の言葉が与えられ、ある人にはその同じ“霊”によって信仰、ある人にはこの唯一の“霊”によって病気をいやす力、ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。

[1]　言葉を超えた「聖霊」の働き

皆さんはいつから教会に行くようになり、イエス様を信じるようになられたのでしょうか？皆さんお一人おひとりのドラマがあると思います。いつかそういう体験を皆で分ち合うようなことが出来たら、私たちの交わりのためには本当は良いだろうなあと思っていますが、どうでしょうね。

　以前の自分は、このような教会生活をしていくようになるなんて考えてもいなかったという人もいらっしゃると思います。私自身もそうなのですけれども。振り返ってみると、（そしてクリスチャンは誰もがきっと同じような気持ちを思っていると思うのですが）、自分で努力して努力して、そしてキリスト教の真髄が分かったのでバプテスマを受けてキリスト者になろうと思ったというのではなく、いつしか「信じる思いが与えられた」ということがあるのではないでしょうか？理詰めというより、ある時「ああ、このイエスという方に自分をお委ねしたい」というように、自分を明け渡すと言いますか、自由になるような感覚を抱いて信仰に入られた、ということがあるのではないかと思います。これはもう「言葉」を超えているのですね。聖書はそれを「聖霊のお働き」と語ります。先ほど読んで頂いたコリントの信徒への手紙一の12章3節にはこうありました。「また、聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです」と。聖霊。神様の霊ですね。聖霊は、私たちの心に働きかけ、信仰の告白へと導いてくれる存在です。そして、その導かれ方というのは一人ひとり皆違うものです。多様性、バラエティがあります。けれども共通していることがあると思います。それは。そこに深い安心（平安）が与えられるということではないでしょうか。

［2］ 様々な賜物―全体の益となるために

今日5月12日というのは、「母の日」でもあります。また、私たち川越キリスト教会の伝道開始が、今から56年前の「母の日」の日曜日の礼拝から始まったという歴史を持っています。これも意味があるなぁと思います。母の日の始まりは、一説によると、アメリカの日曜学校の教師もしていたアン・ジャービス夫人という方が亡くなり、娘であるアンナがその記念会を数年後に行った際に皆に母が好きだった白いカーネーションを配ったというのが最初だと言われています。亡くなったお母さんアンは、仲間と共に、南北戦争の時には敵味方の区別なく負傷兵の手当てをする看護師の役割もされていたそうです。また戦争後も彼女はアメリカ人たちを結びつける平和活動を担っていたということですが、実は彼女自身も子供を戦争で失ったりした辛い人生を送られたようです。その母の人生と、すべての母親を思って、カーネーションを配ったのが始まりで、アメリカは公に1914年にこの5月の第二日曜日を「母の日」に決めたということのようです。

「母」という存在は、特に命を生み出すとても大きな存在ということになりますが、私たちは大抵誰もが「親」という者がいるわけですよね。つまり、自分で生れるぞと言って生まれてくるわけではないですね。受け身です。そして、子どもは赤ちゃんの時から幼児期までは誰かにお世話されていなければ生きて行くことは出来ませんよね。人間の命って、ある意味とてもか弱いものとして与えられている。でも、世界中誰ひとり同じ存在はいない。これは本当にすごいことだと思います。神秘だと思います。創世記によると、人間が誕生した時、神様の息吹が吹きかけられて人は生きた者となった、とありますよね。とすると、人は生きている間、神様の息を頂きながら日々を暮らしているのではないでしょうか。神様は真の親と言ってもいいのではないでしょうか。そして、その神様によって創造された存在に同じ人はいない。コリント第一の12章4節には、このような言葉があります。「賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です」。人間は皆、それぞれ違う神様からの贈りものを頂いているのだと。人間的に見ると、随分神様、不公平じゃないの？と言いたくなることもあるかもしれませんが、私たち一人ひとりを含め色々な人がいるということは実はとても素晴らしいことなのだ、神様の霊のお働きなのだ、とパウロは語っているのだと思います。

パウロはこれを、コリントの教会―教会内の不一致だったり、党派争いだったり、差別や奢りも内部にあったなかなか大変なコリントの教会に宛てて書いているのです。8節以下をご覧頂くと色々な賜物が出てきます。人がそれぞれ与えられる賜物には違いがあるし、あって良いのだと。ただ大事なのは誰かが強引にやっていくというのではなく、7節に書かれているように、「一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです」と。 信仰の共同体といえども、スッキリいかないこと、ちょっとややこしいなぁと思うことも時折出てきますよね。でも「誰かの益」ではないのです。パウロは「全体の益になるために」と言いました。この「全体の益」って何なのだろう？と考えました。皆さんはどう思われますか？教会が、他の世の中の団体と最も違う要素はどんなことでしょうか？教会もまた「組織」ではありますよね。けれどもその組織というのは。「全体の益」に資するための組織であるはずです。会社という組織であるなら、「全体の益」というのは、まず利益（利潤）になりますよね。でも「教会」はそうじゃない。

パウロはこの第一コリント12章の後半で「あなたがたはキリストのからだである」と言って話を展開しています。「キリストのからだ」とは何か。それは、ただ色々な部分が有機的に体のように繋がり、動く、ということではないと思います。それではあまり会社と変わりがありません。12章12節以降でパウロは「一つの体、多くの部分」ということを述べていますが、私は22節、26節の言葉がとても響いてくると思いました。「それどころか、からだの中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。…一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。」これは凄い言葉ではないでしょうか。もし機械やロボットであれば、役立たずの部品は処分されてしまうでしょう。しかし教会は、キリストのからだは、そうではない！と聖書は言います。「からだの中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです」。何故か。‟一緒に苦しむ、共に荷を担う”ということがこの交わりでは起こるからです。

［3］ 十字架の愛のもとに集められ

私は教会という所について、ちょっと勝手に思い違いをしていたな、と思わされています。私は教会という所は強いリーダーシップが必要で、そして強い役員がいて、明るくアグレッシブに動いていくのが理想のように思っていたかも知れません。今私は強いリーダーシップを持つ必要は無いのだと思っています。皆さんもそれは要求していないと思います。そうではなくて、教会とは、パウロが語るように「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶ」そういう共同体であり、その交わりの中心に十字架のキリストが居て下さる。それをお伝えするのだと。そして、皆さん、思って下さい。皆さんお一人おひとりがイエス様によって「教会」に招かれている。この「主の体」を形成しているかけがえのないお一人なのだと。あなたが居て下さるので、教会は教会になっているのだと、本当に受け止めて頂きたいと思います。主イエス様は、命がけで私たちを招いていて下さっている。その重みです。

　ナチスの時代に、人々の痛みを負って生きたボンヘッファーの『共に生きる生活』の中の言葉が今私の私にとても響いているのですがちょっと紹介させて下さい。―「（ガラテヤ6:2を受けて） キリストの律法は、重荷を負うことの律法である。重荷を負うことは、苦しみを引き受けることである。兄弟は、まさにキリスト者にとってこそ、担うべき重荷なのである。他者はただ担うべき重荷である時にのみ、兄弟であるのであって、他者は決してわれわれが支配すべき対象ではないのである。人間の重荷は、神ご自身にとって重たかったので、神は、その重荷を負って十字架にかからなければならなかった。神は、イエス・キリストのからだにおいて、実際に、人間〔の重荷〕を引き受け給うた。しかし彼は、母親がわが子を負うように、羊飼が失われた小羊を負うように、人間〔の重荷〕を担い給うたのである。人間〔の重荷〕を引き受けることによって、神は、彼らとの交わりを持ち続け給うた。それは、十字架において成就したキリストの律法である。キリスト者は、この律法にあずかっている。キリスト者は兄弟の重荷を負い、引き受けなければならない。」

　私たちが礼拝に参加するということは、今は参加出来ていない兄弟姉妹の重荷を負って参加していることだと思います。そして更に、まだ主のことを知らない方と一緒に参加しているとさえ言ってもいいかもしれないと思います。先に主イエスの十字架の愛に与った私たち、私自身そうですが、それはやはり、イエスに見出されたあなたはどう生きるのかと問われているのだと思います。新しい57年目をご一緒に進んで参りましょう。お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、私たちの教会が伝道を開始して56年が経ちました。伝道はあなたの業ですが、また同時に私たちとの協働の業でもあることをも思います。あなたは私たちをかけがえのない存在として尊んで下さいます。主はいのちを与えませり、我何をなして主に報いし、とありますが、どうか主の愛の大きさ深さをもっと教えて下さい。主イエスの律法は重荷を担い合うこと、そこにキリストの体が造られることを知りました。どうか共に集まり、対話し、祈り合い群れとして進んで行くことが出来ますよう、導いて下さい。この新しい一週間も、どんな中にあっても絶望することなく、あなたの愛を信じて勇気をもって歩むことが出来ますように。主の御名によって祈ります。アーメン。